

---

# 今でも君を

きらとも

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

今でも君を

### 【Zコード】

N1466D

### 【作者名】

きりとも

### 【あらすじ】

一人の少女の一一度と出来ない淡い恋の物語

最初に彼に会つたのは私が転校した小学5年の春だつた。

初めて転校と言うものを経験した私はとても緊張していた。もともと誰とでも仲良くなれると思つていた自分の性格だつたけどなかなかクラスに馴染めなかつた。

そんなある日体育の授業で50メートル走をする事になり私は前の学校ではあまり足が早い方ではなかつたが運動は大好きだつた。

「よーいドン」先生の合図の声に合わせてピストルが鳴る。

全力疾走！なんと私はクラスの女子の中で一番になつた。

前に住んでいた所は縁が多く田舎だつた事もあり良く外で遊んだ。

父と母の離婚が決まり母についてきて引っ越した先は都会の学校！縁もなく学校の前と言つと大道路！教室の窓は二重になつていた。そんな田舎で育つた私が都会の学校で一番になるは何もおかしな事ではなかつたがクラスのみんなにしてみれば今までいた人で予想がついていた順位が変わつたと言つ事でザワザワしていた。それ以来私はクラスにも馴染み友達も少しずつ多くなつていつた。ある日下校のホームルームの前、早めに掃除を終えた私はみんなが家に持つて帰るプリントを配つていた。ふと視線に気付いた方を向くとクラスメートの男の子がこっちを見ていた。引っ越して間がない私はまだ名前と顔が一致しない。

とりあえず二コリと笑つた。

学校帰り友達と一緒に帰つていると話題は好きな子の話しへ友達のユカが私に聞いてきた

「トモは好きな子出来た？」

「まだ名前と顔が一致しない」

と答えた。

「でも、もうトモの事好きだつて子がいるんだつて」

「えつ？誰？」

私はビックリした。まだ転校して来て日が浅い上にクラス全員の顔と名前も一致しないのに…

「あつ！」

その時急にユカが大声を上げた。

「なに？どうしたの？」と聞くと

「ほらほら前にいる青い服着た子！小川雅人おがわまさとあの子だよ」

とユカが言つた瞬間私はドキッとした。

えつ？あれが小川雅人？さっき教室で目が合つた男の子だった。雅人の家は私の家から近いアパートに住んでいたらしくたびたび帰りが一緒になる事もあつた。

クラスにとけ込み始めて数日が過ぎた頃何度も席替えがあり私は雅人と隣の席になつていた。

私達の学校は給食時間になると班を作りご飯を食べる。前の席の男の子しゃく翔が話しかけて来た

「お前誕生日つていつ？」

「えつ？8月30日」

「まじで？おまえらお似合いじゃん！」

私は翔が言う意味を理解出来ずにはいた。

「はつ？何が？おまえらつて誰？」

と聞き返すと翔は

「雅人！雅人！こいつ8月31日誕生日！」

ふと私は雅人の方を向いた。雅人はシャイな性格なのか耳まで真っ赤にして恥ずかしがつっていた。それからと言うもの何かについて雅人と私はからかわれていた。

いつからか私は雅人を意識するようになり好きになるのに時間がかからなかつた。

12月になり友達のマミがクリスマス会を開こうと言いました。みんなでプレゼント交換をする為に五百円でプレゼントを買ってマミの家に行つた。

「「」んちは

「マミが出てくる

「いらっしゃい！みんな来てるよ」

リビングに入りビックリした！何人か男の子が来ていた。その中に雅人もいたのだ。

「ちょっとマミ何で男の子いるの？」とマミに聞くと

「せっかくのクリスマスだからみんなの好きな子呼んだんだよ」

私はしつかりしてゐなあと感心しつつクリスマスに雅人と一緒にいれる事をマミに感謝した。

一通り料理も食べ終わりプレゼント交換をする事に！

男の子が買つたプレゼントは女の子に行くように女の子が買つたプレゼントは男の子に行くように別々に集めた。 プрезентを選ぼうとしていたら突然私の目の前にマミが袋を出した。

「トモ、これ雅人が持つてきたプレゼント」と私に渡してくれたのだ

「ありがとう」

「マミはみんなに

「誰が誰のかわからぬからみんなで見せ合ひこしよう」

私は急に恥ずかしくなつた。雅人は私が雅人のプレゼントを持つてゐる事は知らなかつた。私は普通に袋から取り出して見た。中にはハンカチとハートのネットクレスが入つていた。

「これ誰のプレゼント？」すかさずマミがそう聞いた 「俺！」

雅人が恥ずかしそうに答えた。するとまた翔が

「やっぱりおまえらお似合いじやん」とまた茶化してきた。私と雅人も何も言わなかつた。何も言えなかつた。

クリスマス会も終わりに近づき冬と言う事であたりはすつかり暗くなつていた。みんなで帰ろうかと話していた時翔が急に

「おまえら両思いなんだから一人で一緒にかえればいいじやん」とまた私と雅人を茶化してきた。 何も言えずにいるとみんなも翔と一緒になつて私達をわざと一人にするように帰つて行つた。

もともと家が近いと言う事もあり一人で一緒に帰った。何を話したらしいのかわからず黙っていた。きっと雅人も同じなのかな?と思つていたら雅人が口を開いた

「あのさあ、俺お前の事が…好きです」

突然の事でごくビックリして私の口から出たのは

「ありがとう」だった。

そのあとは何を話したのか頭がボーッとして覚えてない。

何日かたつてだんだん喜びが大きくなりクリスマス会で当たつた雅人のプレゼントを見ては雅人を思いだしペンドントを外す事が出来なかつた。

そのまま冬休みになり雅人には会えなかつた。

新学期が始まりお互いを意識していつも通り普通にしゃべれなくてギクシャクしていた。そう言えばもうすぐバレンタイン今度は私が何か送ろうそう思つた。チョコレートを作りまだ寒いので手袋を買つた!

気が付けばクリスマスの返事もしてないままだつた。私は勇気を振り絞りチョコを渡し

「好きです」そう言つた。でも、私達は幼かつた。今でなら付き合う付き合わないとか言う話しになるんだろうけど私達が小学校の頃はそんな事はまだ早いと言う感じだつたし両思いになれた事が何にしろ嬉しかつた。

又春になりクラス替えの時期になり私達は別々のクラスになつてしまつた。そのまま卒業を迎えいつしか雅人はどんどん遠くなつて行つた。

中学になり私達の中学生は3つの小学校から人が集まり人数が多く一年生だけでも7クラスまであつた。こんな大人数のなか雅人と同じクラスになれるはずもなく一番最悪な方向に進んだ。

私は1組になり雅人は校舎の離れた7組に…なれない生活にすれ違う中で次第に雅人の影は薄くなつていつた。

そして一年がたち二年になり三年になつた日また雅人と同じク

ラスになつた。

何度か廊下とかではすれ違つたりしていたけど話すことも出来ずに同じクラスになれた今近くで見る雅人は大人っぽくなつていた。でも、すぐそんな事思つてるのは自分だけなんだと思いしらされる事になる。

三年になり数日が過ぎ何度も席替えがありそのたびに雅人と私は偶然隣の席になつっていた。

その頃の担任は女の先生でみんなと仲良くなつて欲しいと言う事で席替えはクジ引きになつていた。クジ引きと言つても少し変わつていた。

生徒は普通に丸められた数字の書いた紙を一人ずつ引く。このままだと前から順番に数えれば自分がどの場所で嫌なら他の人にかわつてもらう事が出来てしまつからと別のノートに先生が勝手に番号をふり一番の人から順番に席が決まって行くビンゴゲームみたいなやり方だつた。

だからだれにも仕組む事は出来なかつた。

最初は偶然！それが一、二度となると回りの反応は偶然から運命に変わつていつた。小学生の頃と同じまた雅人と私はからかわれることが多くなつていつた。そんなある日用事があつて雅人に声をかけた。

「雅人！」

雅人は返事をしない。

「雅人つてば！」

そう言つた瞬間雅人は

「俺に話しかけるな！」

そう言つた。

すごくショックだつた。まわりの女の子とは仲良く話すのに私には返事もしなくなつた。

偶然はずつと続くものじゃなく次第にバラバラの席になつて行つて私と雅人は話さなくなり目も合わなくなつた。

季節はどんどん流れ受験が近づいてきた。私は友達と高校の説明会に出掛けた。

説明会は学校にも行かなくていい上に雅人に会わなくてすむ。一緒に教室にいても雅人が遠く感じて辛くなることがない分気が楽だった。

その日行った高校の説明会の帰りみんなで遊びに出た。女の子が集まるときの話は決まって恋の話だった。

いつもは私とユミはみんなの話を聞いてるだけだった。でも、その日は違ったみんながユミの好きな人を聞き出そうとしていた時ユミが

「トモと一緒に話がしたい」

そう言った。

一人になつてユミが聞いて来た。

「トモは好きな人いる?」

私は何も答えられなかつた。

「私ずっと言おうか迷つてた。私が好きになつた人トモと同じなんじやないかと思つて話せなかつた」

えつ?私は誰にも雅人の話しさはないはずだし、ユミは中学になつてからの友達だから知つてるはずはない。私は色々考えたけど思いきつて聞いてみることにした。

「もしかして雅人?」

私がそう言うとユミは急に泣き出した。

「トモ、ごめん。やっぱリトモも好きなんでしょう?」

ビックリしたのとショックでとっさに

「好きじゃないよ。大丈夫だから!協力するよ」

そう言つていた。

私は小学校から雅人と一緒だつた。でも、中学から一緒になつたユミが雅人を好きになる。雅人の事でそんな知らない事が増えていくそれが悲しかつた。

もう雅人にも嫌われてしまつているし本当にこれで諦めなくちゃいけない

けないと思った。その夜は一人で泣いた。

次の日からは雅人を忘れ様と努力した。

夏になり中学最後の体育祭が近づいていた。

「誰か応援団してくれる人いますか?」さつきからしきりに先生がそう言つていたがみんな下を向いたままだった。

「じゃあ、しょうがない恨みっこなしにジャンケンで男の子一人。女の子一人決めて!」

そう先生が言つた。

みんな必死にジャンケンをしている。

「では、決まりました。男の子は小川雅人くん。女の子は吉川トモさんです」

みんなはジャンケンにかつてホッとしていた。

私は複雑な気持ちだつた。

応援団の練習は放課後に毎日続いた。

雅人は応援団長になつた。

もともと責任感が強かつた雅人はすぐにみんなをまとめる様なリーダーになつた。

あんなに話すのはさえ出来なかつたのに今は雅人と普通にしゃべつている。少し私はホッとしていた。

練習も終わりみんなで一緒に下校する事になつた。私は毎日の練習で足を痛めていて早く歩く事が出来ないでいた。

「先に帰つていよい。

足も痛いし、ゆっくりみんなの後ろ帰るから」

そう友達に言つた。

雅人と一緒に入れるのは辛かつた。ましてやコミニの事を思うと…

色々な事を考えながら歩いていたら目の前に雅人が立つっていた。

「何してんの?みんなもう行つたよ」

「足が痛くて早くあるけないだけだから。雅人はみんなと一緒に

帰つて!」

そう言つた。確かに足は痛かつたけど心の方がもつと痛かつた。

雅人はそれ以上何も言わずに私の歩くペースに合わせて一緒に歩いてくれていた。

家に着かなければいいのに何度も歩きながらそう思つた。そんな私の気持ちが歩く早さをさらにゆっくりにしていた。

その事に気付いた時友達のユミに本当の事言つ勇氣もなかつた。協力するなんて言つてユミを裏切つて私は何て嫌な女なんだろう…そう思つた。やっぱり私は雅人を諦めきれずにいた。ユミの事を考えるとどうしたらいいかわからず悩んだけど誰にも言わずに好きでいよう。私の好きつて言つ気持ちは友達としての好きだからと自分に言い聞かせた。

体育祭も無事に終わり受験が近づきあたりは恋どころではなくなつていた。

必死になつて高校に受かつた後はもう卒業式！なんだか色々な事があつたからかすごく早く感じた。

雅人ともこれで最後かな？そう思つていた。　　家に帰り仲の良い友達何人かと遊び歩いた。

ユミが突然

「トモ、私最後だから雅人に告白しようと思つんだけど協力してくれる？」

複雑な気持ちだつた。だけどユミに協力する事にした。私の気持ちは誰にも知られるわけにはいかなかつた。

雅人の家に電話をかけた雅人のお母さんが出た。

「雅人くんいますか？」

「ちょっと待つてね」

そう聞いてユミに電話を変わつた。　　私は遠くからユミが電話で話してゐるを見ていた。少しあつて電話を終えたユミが近づいてきた。結果を聞くのが怖かつた。

ユミは私の気持ちを知るはずもなく話し出した。

「好きな人いるんだつて…。ダメだつた」

そうユミは言った。私は少しホッとしていた。雅人がユミと付き合う事になつていたら… そんな事を考へてゐるのにユミに協力した自分が本当に嫌でしかたなかつた。

それと同時に寂しさもつのつた。雅人はもう別に好きな人を作つてたんだ… そう思うとやりきれない気持ちになつた。

何日も何日も眠れない日が続き何もする気がおきなかつた。私の気持ちをお構いなしに月日は流れ私は高校生になつていた。

私は少し遠い女子高に通う事になつていた。もちろん中学の友達は一人もいない。私と雅人の事を知つてゐる人も誰もいない。

学校には電車で通つた。日々の生活の中で私は雅人を思い出す時間が少しづつ少なくなつていつた。

いつも通り駅に歩いていると

「トモ？」

後ろから声が聞こえた。振り向いてみるとそこには中学の時の友達メグミが立つていて。

「久しぶり！」

私達は昔とは違う制服、まだ慣れない学校生活の中で久しぶりに会つた友達に喜んでいた。

お互いの学校生活の話をしている時フツとメグミが

「雅人元気にしてるよ」メグミは雅人と同じ学校だつた。私はドキッとした。忙しさの中で雅人の事を思い出さなくなつていった事もあつたがまだ雅人の名前にドキッとしている自分に気付く。

「そつか、メグミは雅人と同じ学校だつたよね」

知つているのに知らない振りをした。

「トモ、雅人とは仲良かつたもんね」

えつ？ あんなにギクシャクした私達をそんな風に見てたの？ 私は少しビックリした。

「そうそう、雅人今ポケットベル持つてるよ」 メグミはそう言った。

私達が高校生の頃まだ携帯はあまり浸透していなかつた。ポケベルは電話に決まつた通りの数字を打つと相手のポケベルにメッセージが入るそんな物だつた。今で言つとメール限定の小さな機械という感じだつた。私は高校生になり学校も遠い事からいつでも連絡が取れる様にと母が持たせてくれていた。

「へえー。そなんだ…雅人もポケベルとか持つてんだけね」

そう言つのがやつとだつた。『雅人の番号教えるよ。連絡してみたら? 雅人もきっと喜ぶよ』

メグミはそう言うと雅人のポケベルの番号を教えてくれた。勝手にこんな事してもいいのかなあ? 少し戸惑つたけど番号をポケベルのアドレス帳の中に入力した。

「あつ! 電車が来る!」

メグミはじやあねと言つと走つて行つてしまつた。その日1日私は雅人に連絡したい気持ちとまた拒まれたらどうしようと思つ気持ちで雅人には連絡出来ないでいた。

次の日また駅でメグミに会つと

「私雅人とはクラス違うけど昨日バッタリ会つたから雅人にトモの事伝えたよ。ポケベルの番号教えた事も話したから。連絡してみた?」

メグミがそう言つた。

えつ? 雅人知つてるの?

私は少し怖い気持ちもあつたけど

「雅人何か言つてた?」

勇気を出してメグミに聞いてみた。

「何も言つてないよ。連絡してみなよ」 そう言つとメグミはまた電車が来ると走つて行つてしまつた。

私は一人になり考えた。

雅人が知つてゐる? 連絡してもいいって事かなあ? 色々考えてみたけど思いきつて雅人に連絡してみる事にした。

雅人のベル番号を押し少し緊張した。何を入れればいいんだろう？考えてなかつた…勢いでかけてはみたもののメッセージが思いつかなかつた。とりあえず

「おはよう！久しぶり。トモです。元気にしてる？」と打つと自分のベル番号を入れた。

何分間かたつが返事はない。

無視されたんだ。やっぱり連絡しなければ良かつた。そう思つていた時内ポケットに入っていた私のベルが震えた。

半ば諦めかけていた私はノゾミ（高校の友達）だろうと思いベルを覗きこむ。

私は期待をするのが好きではなかつた。期待はいつも私を裏切つていてからだ。

でもそれは喜びに変わる事になる。 雅人だ！雅人からの返事だつた。

「おはよう！久しぶり。元気にしてるよ。お前も元気にしてる？」

何度もかに分けてそう入つてきた。ベルは16文字までしか入らなかつた。

何でもない会話だつた。それでも私はすごく嬉しかつた。

それから毎日ベルで雅人と話しこした。内容は学校の事など本当にどうでも良い事だつたけど家は近かつたが偶然にでも会えることがなかつた。私はそんなどうでも良い内容でもただ単に素直に嬉しかつた！

毎日のベルの会話も恒例になつて来た頃

「お前もうすぐ誕生日だろ？」雅人からそうベルが入つた。

覚えてくれていた。小学生の頃に話しただけだつた私の誕生日を雅人が覚えてくれていた！もちろん私も雅人の誕生日を忘れた事は一度もなかつた。1日しか変わらない私達の誕生日を忘れるはずはなかつた。

「そうだよ。プレゼント待つてるから」私は冗談ぽくベルを送つた。

私の誕生日の日学校から帰つていると雅人からベルが届いた。

「お前の家の下でまつてるから」

私は急いで駅から自転車を飛ばして帰った。

雅人は家の下で待っていた。いつもと変わらない景色、いつもと変わらない家の前に雅人はいた。それだけですごく幸せな気分になつたし、景色も違つて見えた。久しぶりに会う雅人にドキドキしながら本当に久しぶりに雅人と話す事に少し恥ずかしかつた。

「はい！これプレゼント。」

急に雅人が私の前にキレイに包んだ紙袋を差し出す。中身がどうでも気になつたけど今は雅人と話す事に夢中になつて一人で遅くまで話していた。

「もう遅いから帰るわ」雅人がそう言つて時間を確認した。

「えっ？もう9時？」

私はビックリした。夕方から家の前でずっと話をしていた。久しぶりに会つて話す内に時間が経つのも忘れた。

私はお礼を言い家に入った。すぐに雅人がくれたプレゼントを開けてみた。

中にはかわいいぬいぐるみが入っていた。雅人がぬいぐるみを買う姿を想像して少し笑つてしまつたけど恥ずかし思いをしながらプレゼントを買ってくれたのかなあ？と思うとすごく嬉しかつた。

そんな嬉しい気持ちをかきけすかの様に田々は過ぎていき私はバイトをする様になつていた。

忙しい毎日に次第に雅人との連絡は途絶えていき私は友達の紹介で知り合つたジ Yunと付き合う事になつっていた。

初めはただ話しをしていただけだつたけど徐々にいるのが当たり前になつてしまつて何となく付き合うという感じだつた。

今思うとジ Yunの事好きだつたのか正直わからないけれどその時の私はとにかく一人にはなりたくなかった。

家に帰れば誰もいない真っ暗な家。父親がいない私と姉はこの頃になり母親ともあまり顔を合わすことがなくなつていた。

私はバイトを、姉は専門学校の寮に入り母はと言うと仕事から帰ると彼のご飯の準備をし、毎日彼の家へ泊まりに行っていた。

バイトで疲れて帰つてもお帰りと声をかけてくれる家族は家には一人もいない。母に会うのは週一回程度1、2時間顔を合わせる程度しかなかつた。普通にしてたつもりでも結構寂しかつたんだと昔を思うとそう感じる。

ただ一人になりたくなかつた。

一人の時間はとても長く感じたし、何があるわけでもなく涙が出る時もあつた。だけど母を責める気にはなれなかつた。母は父と暮らしている時毎日の様に暴力を振るわれアザを作つてい。私が母のお腹の中にいる時にも酒を飲み酔つぱらつた父は母を投げ飛ばした。私が生まれた時は男の子が欲しかつた父は

「また女の子か！全然かわいくない。本当に俺の子か？」とも言った事を母から何度も聞いていたからだつた。

次第に私は自分を必要としている人間はこの世にはいない。私はいなくてもいい人間なんだと思った。次第に私は自分で自分を傷つける様になつて行つた。そんなある日雅人の夢を見た。無性に雅人の声が聞きたくなつた。　その頃の連絡手段はベルから携帯へと変わつていて私はまた友達に雅人の番号を教えてもらつた。

雅人は私の番号を知らない。電話をしても出てくれないかもしれないと思つたけどかけずにはいられなかつた！

「もしもし？」耳から聞こえてきたのは昔と変わらない雅人の声だつた。

「もしもし…」そう言つただけで雅人はすぐに私だと氣付いた。色々な話しをするうちに雅人は高校を中退し仕事を初め寮に入つていた。

仕事場は私達が住んでいた町から電車で1時間もかかる場所だつた。

それから雅人は

「彼女が出来た」そう言つたのだ。

私は当たり前かと思いつつまた私の知らない雅人に少し寂しさを感じた。

雅人の彼女は7歳年上。友達のお姉ちゃんだと言うことだった。  
「どれくらい付き合ってるの?」 私は変な質問をしてしまった。  
「二年間かな?」

そんなに前から?雅人と連絡を取らない時間がとても長く感じた。

雅人は

「近々友達に会いに実家に帰るからお前のバイト先で飯でもおごつて」と言つた。

久しぶりに雅人に会えるそう思つたけど雅人には彼女がいるのだと自分に言い聞かせた。

雅人が実家に帰つて来た日の夜一緒に私のバイト先でご飯を食べた。

帰り道雅人は

「友達と約束があるから自転車を貸してほしい」と言つた。

「いいよ!明日学校あるから家の前に自転車止めて鍵はポストに入れといて」

「わかった。じゃーお前の家まで送るわ。後ろに乗つて」  
バイト先から私の家までは歩いても5分位の距離だつた。雅人に  
言われるまま私は自転車の後ろに座つた。

たつたそこまでの距離だつたけどすごく嬉しかつた。この時間  
がもつと続けばいいと思つた。

朝自転車は言つてた通り家の前に止められていた。夜中雅人  
が私の家まで來た事を思うと胸が苦しくなつた。

それからまた私達は自分の生活に追われ連絡をとらなくなつた。

何年も経ち私達は20才になつていた。私は仕事をしながら独り暮らしを始めていた。

そんなある日また雅人の夢を見た。あの日以来雅人の夢は何度か見ていたけど何となく携帯を手に取り雅人の番号にかけてみた。

何年かたつてるし番号も変わっているかもしね。

「もしもし」

電話に出たのは雅人だった。

「久しぶり。元気?」

いつもこんな会話をしている様に感じた。

色々話した。どうやら雅人はまだ年上の彼女と付き合ってるらしかった。彼女との付き合いは4年になっていた。

久しぶりに遊ぼうと言つことになり日にちを決めた。

雅人と遊ぶ当日車で私が雅人を迎えに行つた。

雅人は車に乗り込むと少しして

「お前彼氏は?」

と聞いてきた。

当時彼氏がいなかつたわけではなかつた。年をとつても相変わらず私は一人になるのが嫌だつたし、誰かと付き合う事で少しでも自分は必要な人間なんだと思おうとしていた。でも、私の彼は3ヶ月前から北海道に転勤になり、遠距離恋愛だつた。それに加え1ヶ月前から連絡が途絶えていた。どうやら自然消滅してしまつたらしい…

職場に良く来る人で気になつてゐる人がいたことも… 私は隠さず雅人に話した。

昼間に行く所もなくどこに行くか話した結果私の家で飲むことになつた。その頃雅人は年上の彼女と一緒に住んでいた。彼女は家事を一切しなかつたらしく食事はいつも雅人が作つてたらしく今日は私の為に料理を作ってくれると言つた。

飲むに連れて色々な話をし、雅人は彼女とうまくいつてない事を話しました。 私は正直聞きたくなかった。そんな雅人は見たくなかつた。

「それでも彼女が好きだから一緒にいるんでしょう？」

「友達の姉貴で別れたくても別れられない」

雅人はそう言った。

私はすごく腹が立っていた。別れられない？ 4年も付き合つて？ 雅人の彼女は雅人に必要とされていないのかなあ？ 誰にも必要とされていない自分が重なつて見えてさらに腹が立つた。

「そんなわけないじやん。別れたかつたらとっくに別れてるだろうし、4年も付き合つなんて無理だよ。そんな事いつて本当は好きなんでしょ？」 私は雅人に彼女を好きだと黙って欲しかった。ムキになつていた。

「友達の好きとは違うでしょ？ 雅人がたとえば私の事友達として好きでも彼女のを好きな気持ちとは違うはず！」

自分で言つていて少しむなしくなつたけど止める事が出来なかつた。雅人に解つて欲しかつた。どんな人でも誰かに必要とされる。こんな私でも… そう信じていたかつたし、誰かにそう言って欲しかつた。 「お前が俺を好きなことは知つてた」

急に雅人が言つた。

えつ？ 何でそんな話しに？ それより知つてたつて？

「トモこっちに来て」

たぶん雅人は酔つている。おそらく私も… それでも雅人を拒む事が出来なかつた。

静かに雅人の前に行つた。

雅人は優しく私を抱き締めた。何も考えられなかつた。昔から大好きだつた雅人何度も後ろ姿をみて愛しいと思つた。その手に触れたかつた。そう思つていたのに…

夢の中にいる気がした。その夜から私は雅人の二番目になつた。

二番目に…

私は何度も雅人にキスをした。今まで触れたくても触れられなかつた時間を埋めるように何度も何度も…

「トモはキスするのが好きやな」

雅人はそう言つた。私は何も答えなかつた。本当はキスをするのが好きな訳じやない。雅人だから触れたいそう思つた。でも、彼女がいる雅人に負担をかけたくなかつた。私はどんどん雅人に本当の事が言えなくなつていつた。 雅人は帰り際

「俺は男友達との絆を大事にしたいからここにもあまり来れないかもしれないけどまた必ず来る」  
そう言つた。

雅人が帰りまた一人になつて数日が過ぎていた。冷静に考えるようになつて私はすごく悩んでいた。

私の回りにも浮気や不倫をしてる人がいたし、その人達の辛さ寂しさを知つていたから…もし私が雅人の彼女だつたら? そう考えると彼女に申し訳ないという気持ちでいっぱいになつた。それでも、もう雅人と昔みたいに友達には戻れないと思うとどうする事も出来なかつた。

毎日毎日そんな事を考えていると突然携帯が鳴る。携帯を覗きこんだ。雅人だ!

「もしもし」

「もしもし、俺。今日会える?」

雅人に言われて雅人を迎えに行つた。

雅人は私を

「いい女だ」とたまに誓める事があつた。それは

「泊まって行つて」

「帰らないで」とワガママを言わぬい事だつた…

言いたかつた。ずっと一緒にいて欲しかつた。帰らないで私を一番にしてよ! ずっと心の中ではそう思つていた。でも、そんな事口には出来なかつた。雅人の彼女の事を考えての事もあつたがそれ以上に雅人に嫌われたくなかつた! それぐらい私はワガママだつた弱かつた。でも、そんな私を雅人は知らない…

そんな事を考へているとフツと気になつた。

そうだ、雅人の彼女は何で連絡をして来ないんだろう? 雅人は彼

女になつて言つて出て来ているのか？私は雅人に聞いた。

「友達の所に行つて来るそう言つた。彼女から連絡がないのは俺の携帯トモの家だと圈外だから」

友達？雅人がまさか彼女に本当の事など言えるわけないのはわかつていた。だけどやつぱり私は雅人の一番にはなれない事を改めて突き付けられて少しショックを感じた。雅人はそんな私に気付く事はなく

「俺、地元に帰るといつも一緒に飲みに行く先輩がいるんだけど行つてもいい？」

「いいよ」

「俺の携帯圏外だからトモの携帯から連絡したいんだけどいいかなあ？」

私は雅人に携帯を貸した。

雅人は携帯を切ると

「居酒屋で飲んでるらしいから行く。トモも一緒に行こう」  
そう言つてくれた。

居酒屋に向かう車のなかで雅人の彼女の事が気になつた。

「雅人、彼女に連絡しなくていいの？飲んだら帰れないし彼女心配するよ！」

私はそう言つていた。はじめは渋つていた雅人も観念したかの様に彼女に連絡をする。

「実家に泊まる。先輩と飲むから」

そう言つと雅人は電話を切つた。

居酒屋に着き雅人に連れられ中に入ると雅人の先輩らしき人と同じ席に1人の女人の人ともう1人男の人が座つていた。

雅人は私を先輩に紹介する。

「トモです」

えつ？それだけ？確かに彼女ではないけど…まあ一番目です。なんて紹介はできないか。と思っていると先輩は

「彼女？」すかさず聞いてきた。私は何て答えたらいいのか分からず迷っていると雅人は

「はい…」と答えた。これがイチ（雅人の先輩）との出会いだった。話しをして行くうちに一緒にいる女の人はイチの元奥さんだと言う事が分かった。

雅人はと言うとすごく酔っていた。というより荒れていたのかかもしれない。

その日雅人は歩けない程フラフラだった。そんな雅人を見るのも初めてだった。それでも雅人は私には何も話してはくれなかつた。それがまた寂しかつた。お前じゃダメだと言われている気がした。もしかしたら私の事が原因かもしれないと思つた。

雅人とは相変わらずあまり連絡を取らない。というよりいつ彼女と一緒にいるかわからない。私からは連絡が出来ずにいた。色んな事をいつもいつも考えて私もかなりまといつていた。今日は職場の人達と飲み会だつた。みんなで話をしているうちに何もかも忘れたい気持ちが私のお酒のペースを早めた。そんな時携帯が鳴る。知らない番号だつた。誰だろう？そう思つている内に電話は切れた。すごく気になりその番号に電話をかけてみた

「もしもし？」

男の人の声がした。

「もしもし？さつき電話がかかって来たんですけど…」

そう言つと

「トモちゃん？」と聞かれたその電話はイチだつた。前に居酒屋で飲む時雅人が私の携帯からイチに連絡をした。その時イチは一応番号登録しとくと言つていたのを思い出した。

「はい。どうかしたんですか？」

「あっ、雅人は？」そう聞かれた。

あれ？この人私を本当の彼女だと思ってるのかなあ？本当の彼女

を知らないの？

「雅人はいませんよ。前に雅人は私の事を彼女だといつたけど本当の事知らないんですか？」

私は酔っていた事もありイチにそう言つた。

「えつ？ 知つてるの？」 イチは私にそう聞いた。

何だ知つてたんだ。私が知らないと思つて気を使ってくれた。

「でつ、どうしたの？」

そうイチに聞かれ私はハツとする。

「えつ？ 電話かけて来たのはイチさんでしょ？」

「えつ？ 僕かけてないよ」

「いや確かにかかるつて来たからかけたんですけど…」

「ああー！ 僕、今飲みに出ててトイレに行つてたら友達が携帯いじつてたから間違つて発信したのかも…『ごめん』 「いえいえ！ 間違えならないんです」と言つたけど私達は一度しか会つたことがなかつたし、電話を切るタイミングが分からずについた。

「明日さあ、メシでも食いに行く？」

「えつ？ はい…」

私は急な事でビックリしていた。

「じゃーまた明日連絡するよ」

イチはそう言うと電話を切つた。

次ぎの日私はイチからの連絡はないだろうと思つていた。昨日は二人とも別々に飲んで酔つぱらつていたからだつた。 夕方にはリイチから連絡があつた。覚えてたんだ。イチは私の家の近くまで迎えに来てくれると言つた。大体の目印を教えて30分後に家の近くで待ち合わせた。

イチの車に乗るとイチは酔つぱらつている時とは違つて無口な人だつた。

イチの行きつけの居酒屋に入りお酒が回ってきた私は雅人との

事を打ち明けた。イチは一回り年上と言う事もあり静かに何も言わずただ私の話を聞いてくれた。やっぱり私には一番目は無理だった。本当は少し前から気付いていた。でも、気付かない振りをしてきた。それも今までだと思つた。イチに話をしてしまつた事は私の限界を示していたからだつた。

ご飯も食べ終わり店を出た。

「次ぎのお店に行こう」とイチが言い出し車に乗つた。信号待ちでイチは私に

「俺と付き合おう! こんな良い子にこんな思いをさせて雅人はバカだ!」そう言った。

雅人と別れてもやっぱり一人になることが出来なかつた私はイチを受け入れた。

朝隣に寝ているイチをみてもう後戻りは出来ないそう思つた。雅人には連絡をしないまま時間だけが過ぎた。

何日かして雅人から連絡があつた。

「急に時間出来たからご飯でも食べに行こう」

私は何をどう話せばいいかわからず後で電話すると言い雅人との電話を切つた。その場で雅人に本当の事を伝えた方が良かつたかもしれないけどイチと雅人の関係が壊れてしまつかもしれないそう思つた。

雅人との電話を切つた後私はイチにその事を話した。イチは自分が雅人に話をすると言つた。私から雅人に本当の事を伝えるべきだと思つたが雅人とイチの関係を考えてイチに頼む事にした。

何分かして携帯が鳴つた。イチからだと思つていたがそれは雅人からだつた。「良かったじゃん! イチさんは好い人だし、何でも甘えて頼つていつたらすごく可愛がつてくれるから頑張れよ」

私は複雑な気持ちになつた。

それだけ言うと雅人は電話を切つた。

電話が終わるのを待つていていたかの様にまたすぐ携帯が鳴る。イチからだつた

「雅人に話したよ。ともは良い子だから大事にしてあげてください。俺も惜しい事したつて…あいつにそう言われたよ」 雅人がイチに気を使って言つた言葉だとすぐにわかった。

今度こそ雅人の事は忘れよう! そう決心をした。

それからイチは毎日会いに来てくれ次第に一緒に住むようになつていた。

朝イチを見送つて私も仕事へ行く準備をしているとイチから電話がかかつた。

「もしもし、どうしたの?」 そうイチに聞くと

「今雅人から電話があつた。ともに友達で田川ミキって子おるやろ? 昨日の夜事故にあつて死んだらしい。今日夜お通夜があるらしいから」

「えつ? ミキが? 死んだ? 何かの間違えじゃないの?」

私はあきらかに動搖していた。

イチとの電話を切りとりあえず職場に向かつた。職場に着くと急いで新聞に載つているお悔やみ欄を見た。そこには

(この度、田川ミキは不慮の事故により帰らぬ人となりました。) その新聞記事を見ても頭の中で理解が出来なかつた。

お通夜の会場に行くと少しして雅人が私を探して走つて來た

「トモ、知つてた?」

「全然知らなくて…教えてくれてありがとう

「イチさんは元気?」

雅人は時々イチに連絡をしているらしかつた。

「元気にしてるよ。雅人は元気にしてた?」

「元気だよ。それより先輩と結婚しないの?」

「…うーん…。雅人は彼女と付き合い長いのに結婚しないの?」

「俺はしてもいいんだけど彼女があまりいい返事しなかつた。それにもう別れたから…」 別れた? 何で? そう聞こうと思つてたのに

「何でいまさら？じゃあー何での時に…」

私の口からはそんな言葉が出ていた。

雅人は

「そんなこと言つたら…」

その時お通夜が始まった。私はお通夜中あの時イチを受け入れず寂しさに耐えて一番目だつたらもしかして雅人の一番になれたのかなあ？そんな事を考えていた。

お通夜が終わり友達が沢山いるなかで雅人とはそれ以上話せなかつた。帰りにバッタリ会える事を願い雅人の実家の近くまで行つてみた。高校の頃近くに住んでいてもバッタリ会うことがなかつたのに今さら会えるわけはなかつた。もつと話したかった…でも、それは叶うことはなかつた。

家に帰り着くとイチが優しく向かえてくれた。そんなイチを見て雅人の事を考えていた事に罪悪感を感じ、本当にミキが死んでしまつた事実に涙が止まらなかつた。

それでも日々は巡りいつも通り回りも私も普通の生活に戻つていつた。

雅人からイチに電話があつたのはそんな時だつた。

イチは雅人と電話を終えると

「雅人、彼女と別れたらしい。色々話したい事があるみたいだから明日泊まりに来る事になつたから」

「…そう…。わかつた」

当時イチと私の家は引っ越しをし一軒家を借りていた為雅人が来ても会わなければ大丈夫だろうとそんな甘い考えを持つていた。次ぎの日イチが雅人を連れて帰つて來た。

「トモも一緒に飲もう」

イチからそう言われ少しだけ飲む事にした。

だんだんイチが酔っぱらい先に寝てしまつた。

私達もそれぞれ別々の場所に横になり話をした。同級生が今どうし

ているか、どうして彼女と別れたのか、聞きたい事を色々と聞いた。

腕をフッと上げると私の手が雅人の指に触れた。久しぶりに雅

人に触れた事に緊張してしまい私は手を動かせなかつた。

雅人も動かそうとはせずそのまま話を続けた。雅人の話が耳に入つて来ない。あんなに愛しかつた雅人に今まで触れている。イチが急に起き上がりトイレに行つた。もう雅人に触れる事は出来なかつた。

雅人が家に泊まりに来た1ヶ月後にビックリする事が起きた。

私は妊娠していた。相手はもちろんイチだつた。私とイチはそれまでに何度も妊娠をしていた。イチはその度に産んで欲しい！一緒にいろいろそう言つてくれていた。でも、私はそれを受け入れる事が出来ず自分とイチの赤ちゃんを何度も殺してしまつていた。

きっと私は自分の気持ちがフラフラしている事、本当にイチと一緒にやつていけるのか、こんな私が子供を育てる事が出来るのか…そんな事を考えるとイチと結婚し子供を産む勇気がなかつた。でも、今回は違う！イチと次ぎに赤ちゃんが出来た時には産もうと話をしていたからだつた。

私はイチと結婚する事になつた。

もちろんイチとの生活に不安はあつたしこんな私でいいのか迷つた。勇氣も出なかつた。でも、もう一度と自分の子供を殺すことは絶対に出来ない！

イチは雅人に電話で結婚の報告、子供が産まれる事を話した。

それから10ヶ月私は赤ちゃんを産んだ…

もう後戻りは出来なかつた。この子の事を考えると絶対に…私がしつかりしなければ…

イチと子供と暮らす今の生活はそれなりに幸せだ。それでも今でも  
君を想い出す……今もきっとこれからもずっと……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1466d/>

---

今でも君を

2011年1月9日03時47分発行